

矢状断 T₂ 強調画像の子宮病変の評価における BLADE の有用性の検討 [大会長賞記録]

島田 健裕, 岡内 研三, 天沼 誠, 遠藤 啓吾

群馬大学病院

目 的

面内の体動補正に優れる BLADE を子宮病変の評価における有用性を評価する。

方 法

対象は子宮の占拠性病変を疑われて MRI を施行した患者 15 名, 平均年齢は 58.7 歳, 1.5T MRI (Magnetom Symphony TIM upgrade, Siemens) で, 通常の T₂ 強調画像と FSE (TR/TE=5000/80) と BLADE 併用 FSE (TR/TE=5500/93) を撮像し, 両者における正常子宮の SNR を計測した。また, 病変の輪郭, 子宮の輪郭, 周囲臓器の描出能につき 2 名の放射線医師が 3 point scale で定性評価を行った。

結果および考察

BLADE 併用 FSE では撮像時間が短いにもかかわらず (102 秒 vs 122 秒) SN 比は通常の方法と比較して内膜, junctional zone, 筋層ともに 1.5 倍~2 倍で有意に高い値を示した。また, BLADE 併用例では消化管の蠕動運動に伴う motion artifact が有意に目立たず, 子宮お

よび病変の描出能は通常の FSE 法と比較して改善していた。また, 内膜と JZ との境界, 周囲脂肪組織内の血管の同定などでも優れていた。

結 論

BLADE 併用 FSE による矢状断 T₂ 強調画像は撮像時間が短く子宮病変の検出に有用であり, ルーチンの検査として使用すべき方法と考えられた。

